

コミュニティの場としての公園利用

- 利用者間の関わりについて注目しながら -

宇都 明子

1. 背景

1-1. コミュニティについての背景

コミュニティの最初の研究者であるマッキーバーは、コミュニティを「共同生活が営まれているあらゆる地域または地域的基盤をもったあらゆる共同生活」(1917)、つまり、地域性と共同性という2つの特質を併せ持つ概念として提起している。

コミュニティは3つの主要な定義のクラスに分類することができる。第1に、人々が住んでいる地理的にあるいは行政的に定義された場所についての一般的な用語としての使われ方、第2には、やはり場所や人間の集団をさすが、この場合にはより大きな単位を扱い、地域コミュニティという意味を内包するもの、第3の用法は単一の定義というよりも用法の一集団であり、物理的、地理的なものでなく、もっと心理的、象徴的なものを指し示すという点で共通性を持っているものである (Krupat, 1985)。

地域性が後退した現代社会においては、コミュニティという概念も実態との対応が難しく、コミュニティをモデル的に例示することが可能であっても、すべての地域で明確な実態を持っているとは言いがたく、これまでの概念通りのコミュニティの存在は少ない。

そこで、これまでの、「空間の共有」と「時間の共有」によって担保されるコミュニティとは対照的に、コミュニケーションの共有による新たな「共同性の模索」が高まっているのが、現代社会のコミュニティをめぐる状況である (阿部, 1999)。コミュニケーションを通じて何らかの情報がメンバー間に共有されることは、コミュニティの存立にとって不可欠な要素である。よって本研究ではコミュニティを「近隣や地域コミュニティを内包しつつも、誰に対しても開かれており、空間(場所)や時間や情報を共有することで何らかの共通性を持ち、それによって特定される、不特定な構成員を持つ多層的な人の集まり」と定義する。

1-2. 都市と公園

ある地域コミュニティにおいて人々が交流する場所としては、個人の住宅、道路、学校、公民館、公園等、様々な所が考えられる。この中でも特に公園はオ

ープンスペースとして重視されており、公園は地域コミュニティの基本になる場所だと考えることができる。公園は他者とコミュニケーションをとる重要な場所であり、公園の近所に住む人々も公園に集うことで、交流を深め合うことの出来る可能性、さらに地域コミュニティに影響を及ぼす可能性も十分秘めている。

公園には、小公園といわれる住区基幹公園と大公園といわれる都市基幹公園があるが、小公園の中には街区公園(主として街区に居住する者の利用に供することを目的とする公園で誘致距離250mの範囲内で1ヶ所辺り面積0.25haを標準として配置する)と、近隣公園(主として近隣に居住する者の利用に供することを目的とする公園で一近隣住区当たり1ヶ所を誘致距離500mの範囲内で1ヶ所辺り面積2haを標準として配置する)がある。

公園に関してはすでに様々な研究が行われており、公園の利用実態、利用者意識等に関する研究は多数あるが、実際にどのような活動が行われているかについての研究は少なく、また、利用主体の多様化と、その評価に関する実態把握も十分ではない。

2. 問題と目的

2-1. 問題

オープンスペースと利用者、そして利用者のコミュニティを考えてみたとき、あるマンションに設置されているような共同の庭のようなオープンスペースを使う利用者は住人だけであり、そのコミュニティはマンションに住む住民という限られた地域コミュニティである。一方、都市の市街地の中心にあるような公園などのオープンスペースは、利用者は全く限定されておらず、誰に対しても開放された空間で、地域コミュニティは存在していない。

この両者の間に位置すると考えられるのが、街区公園や近隣公園などの小公園と呼ばれるような公園である。このような公園のコミュニティは、地域コミュニティもある一方で、誰にでも開放されたコミュニティなのではないかと考えられる。また、そこで見られる人々間の関わりによって見ることで出来るコミュニ

ティの様相には、公園のセッティングによって違いがあると考えられる。

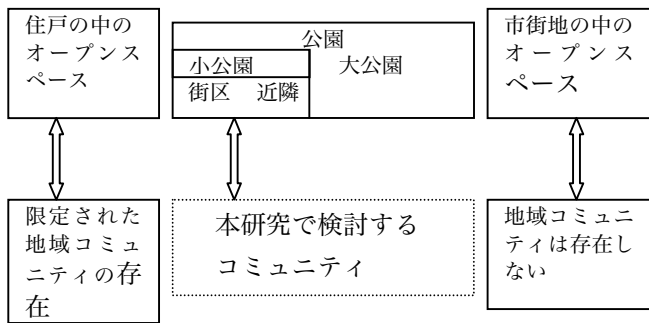


図1. 公園とコミュニティの関係

このようなコミュニティを研究するためには、それが見られる場がなければならない。そこで、街区公園や近隣公園を、地域コミュニティだけのある場と開放され地域コミュニティのない場との領域であると想定した。

2-2. 目的

本研究は街区公園、近隣公園という“住区”と“都市という開放された空間”を両極とした時の中間の領域にある空間の中において、人々の行動や、利用者間の関わり方を見ていくことで、公園を利用する人のコミュニティの構造を検討することを目的とする。また、公園はコミュニティの場としてどのような働きをしているかをも考えていく。

3. 方法

3-1. 調査対象公園

街区公園と近隣公園であり、近接していること、比較的条件的等しい住宅地の中にあるという条件を考慮し、以下の2公園を選定した。

長丘中公園（福岡市南区長丘）

種別：近隣公園 面積：1.1ha



図2. 長丘中公園

長丘東公園（福岡市南区長丘）

種別：街区公園 面積：0.42ha



図3. 長丘東公園

3-2. 調査対象者：各公園の利用者

3-3. 調査期間：2002年11月より2003年1月にかけての計8日間

3-4 調査方法

自然観察法で直接観察を行った。観察手法は事象見本法をもとにした。これは、ある特定の行動に焦点を当て、それがどのように生起し、どのような経過をたどり、どのような結果をもたらすかなどをそのときの状況の文脈の中で組織的に観察する方法である。本調査では、公園内で見られる利用者の行動と関わりに焦点を当てた。

4. 分析

時間	公園	人数、性別、年齢	場所	記号	行動 会話など
7	14東	1F40	その他、不明	B	BはAに「××さん！おはよう」A「あ、おはようございます、あのねー」と立ち話を始める A「じゃあよろしくおねがいしまーす」 Bは買い物袋を持って アウト
8	4	中	ブランコ		犬の散歩 小走りにかけていく Aにおはよう声をかけていく Aはブランコで立ち乗りをして遊んでいる BとCは知り合いではない 犬とおしゃが遊んでいる 犬の種類とか年を聞いている 「7歳くらい」「結構くらいですね～」 「ハイハイ」と言うような会話を交わしている この間30秒くらいでBはすぐアウト Cはリードをはずして池のほうへ降りていく
9	2	中	池付近		Hの残り2人は自転車を降りて滑り台の上でゲームをしながらお話 Gの息子にHの2人が話しかけている「今ここで何しとると？」

表1. データの例

データ（例、表1）をもとに分析を行った。

公園の利用者は両公園とも、小学生男児の利用が多く、また30代の男女が比較的利用していた。小学生以下の利用も他の年代と比較して多かった。また、少なかったのは両公園とも13～29歳までの男女であった。幼児と親の組み合わせの利用者も多かった。

4-1. 公園ごとの利用者の関わりと行動

両方の公園で見られた活動は以下の通りであった。犬の散歩、通り抜け、ウォーキング、散歩、遊び、スポーツ（野球、キャッチボール、サッカーなど）、ゲーム機でゲーム、自転車に乗る、おしゃべり、何もして

いない(ぼーっとしている)、ベンチに腰掛ける、まちあわせ、子どもを遊ばせる、子どもの遊ぶ様子を見ている、歩き回る、

4-1-1. 長丘中公園

車で来る利用者が多かった(エピソード1)。

また、公園の周囲の道路が小中学生の下校路になっているので下校途中に公園によったり、通り抜けていく小中学生が多かった。

ベンチが少ないため、休憩がしにくく犬の散歩などをしている人は通り抜ける人が多かった。また、公園内が広いので犬のリードをはずしてキャッチボールなどを楽しむ人も多かった。このことに関連して、ベンチが少ないためブランコの周辺でゲームをしている子どもが多かった。ブランコの周りの柵は唯一地面以外で腰をかけることができる椅子のような役割を果たしていた。

遊具が少ないためか(ブランコ、スベリ台、砂場のみ)、野球やサッカーをして遊んでいる大人数の子どもが多かった。

フェンスで囲まれていないので、どこからでも入れ、周りから公園の様子が良くわかった。逆に公園からも周囲の様子が良くわかった。

4-1-2. 長丘東公園

利用者が周囲の団地から来ている人が多かった。同じ団地に住んでいる場合が多いので利用者同士が知り合いの場合が多かった。公園が広くないため、場所を広く使うような、大きな遊びは難しく、たくさん子どもが遊んでいると、「中公園行こう」と言って出て行く子どもも見られた。野球などの球技は1つのグループしかできないことが多かった。

ベンチが多く、犬の散歩をしている人が休憩のために座ることや、通り抜けの大人が休憩で座ることが多かった。また、そのような利用者が、子どもたちの遊ぶ様子を眺めていることも多かった(エピソード3)。

フェンスで囲まれている上、公園が周囲より一段高くなっているため、外からは、公園で何が起きているかよくわからず、また公園の中からも外の様子があまりわからなかった。

以上より、公園に配置されている施設などによって利用者の活動に影響があり、また、利用者間の関わり方にも違いが見られた。

4-2. 利用者間の関わり

観察より、対象公園においては、他者(利用者)と他者(利用者)との間に関わりが見られる場面が存在し

ていた。(ここでは、他者は1)来園時に一緒に来園してはならず、2)一緒に来園しなくても、兄弟や家族だということが判明した場合は除く、他者を指す。)

データより、公園内で見られた利用者間の関わりについて4つの特徴的な側面を抽出し、側面ごとにカテゴリを作成し、分析を行った。[以下のエピソード(以下、㊦)で例を示している]

形態(利用者同士の関わり形態)

- ・直接的な関わり(㊦2)：互いに接触を持ち、相互に相手の活動に影響を与える

- ・間接的な関わり(㊦3)：直接には話さず、接触を持たないが、他者が行動に影響を与える

互いの関係(利用者同士の関係)

- ・初対面(㊦4)：自己紹介、相手について尋ねるなどの会話をする

- ・顔見知り以上(㊦2)：名前を呼ぶ、他者をめがけて公園に入ってくる 他者にまっすぐ近づき接触をもつ

- ・その他,不明(㊦3)：判断がつかない場合

介在物(関わりをつなぐために物が介在する場合)

- ・犬・幼児(㊦1)・ゲーム機・野生動物・おやつ

- ・時計・スポーツのための道具(㊦4)・その他,なし

関わり時の状態(利用者は何をしていたか)

- ・犬の散歩(㊦2)・スポーツ(㊦4)・遊び・散歩

- ・子どもを遊ばせている(㊦1、2)

- ・特に何もしていない(㊦3)

分析の結果、直接関わりを持つ場合は、顔見知り以上の場合が圧倒的に多く(㊦2)、この場合、物も介在させない関わりが多かった。一方、初対面の利用者が直接関わりをもった場合、物を介在させた関わりが多かったことが明らかになった(㊦4)。介在物があった場合、まず介在物を中心にして関わりがはじまることが多く、また、他者の所有している介在物や利用者の行動、状態が同じだった場合に、関わりを持つ場合が多く見られた(㊦1)。

[エピソード]

1：男性(50歳くらい)のようだが子どもの祖父には見えないので、たぶん父親)、女性(30歳くらい、母親)子ども(1歳くらい)の3人組の家族連れのようなグループ(A)が車でやってくる。3歳くらいの男児とその母親(B)がスベリ台で遊んでいるところに、Aの父と子がスベリ台で遊びだす。Bの母親がAの子どもに目を合わせて、おどけた表情を作っている。あまり言葉は交わさず、基本的に、交わって遊んではいない。Bの親子はじきに帰る。[直接的・関係不明・幼児・子どもを遊ばせている]

2：小学生男児が大きな犬を連れて公園内を散歩させている。そこへ幼児を連れてきた母親が「××ちゃん、おなかの具合よくなった？」と聞いた。男児はおなかをさすりながら、「う～ん、あんまり良くない」といった感じで首をひねって通り過ぎていく。

[直接的・顔見知り・介在物なし・犬の散歩と子どもを遊ばせている]

3：犬を連れた男性がベンチに座ってグラウンドで子どもたちが野球をしているのを眺めている。ボールのいく先に視線を走らせてかなり熱心に見ている。[間接的・関係不明・ボール(スポーツのための道具)・特に何もしていない]

4：Dの父親が取り損ねたボールをHの1人がとって、かなりの距離があるのをノーバウンドで投げ返す。それを取ったDの父親は「おー、すごいな」と言う。Dの父親がまた取り損ねた球をHが投げ返す。すると、Dの父親がHに「おー、上手だ。何年生か?」と聞く。Hは「二年」と答えると、Dの父親は「二年か」と言う。[直接的・初対面・ボール(スポーツのための道具)・スポーツ]

5. 考察

5-1. 公園の中での利用者間の関わり

分析より、公園においては、顔見知りの人同士だけではなく、初対面の場合でもある程度簡単に他者と関わりを持っていたことが確認された

関わりの中に、物が介在していた場合において、子どもと、特に犬は初対面の人同士の関係性を作るのに関わっていることが多かった。

利用者の間に見られる関わりは同年代、同性、利用者同士が同じ行動、状態にあった場合に比較的良好に起こっていたが、この場合に限らず、異年代、異性、異なった行動、状況の中でも関わりはもたれていた。つまり、同質の集団をひとつのコミュニティと捉えたときに、異なるコミュニティ間でも関わりが存在したということになる。

関わりを持つ利用者の中でも、特に他者と活発に関わりあう利用者が存在したが、このことは、関わりをもつのに、環境だけでなく、人間そのものの特性も影響を及ぼしていることを示唆している。

5-2. 公園の役割、機能

利用者の行動に着目してみると、中公園においては、野球やサッカーなどのスポーツが多く行われていた。東公園においては、野球も行われていたが、遊具を使つての遊びも多く見られた。このことは、公園の持つセッティングが影響していると考えられる。前述したとおり、もともと、近隣公園は街区公園と比較してスポーツ利用をより多く想定しており、公園の持つセッティングがうまく機能していたと考えられる。

5-3. 公園を利用する人のコミュニティ

本研究の対象公園で見られたコミュニティは分析より、「近隣や地域コミュニティを内包しつつも、誰に対しても開かれており、空間(場所)や時間や情報を共有することで何らかの共通性を持ち、それによって特定される、不特定の構成員を持つ人の集まり」であ

ったと言える。

また、東公園の方が中公園より利用者が限定されていたことより、街区公園と近隣公園という種別の違いではコミュニティの構造に若干の違いは認められた。よって、“住区”と“都市という開放された空間”を両極とした時の中間の領域にある公園という場において見られるコミュニティは、それに対応したコミュニティであった。

公園とコミュニティの関係を逆の方向で検討すると、上記で確認されたコミュニティの存在によって、“住区”と“都市という開放された空間”を両極とした時の中間の領域にある公園の意味を見出すことができる。

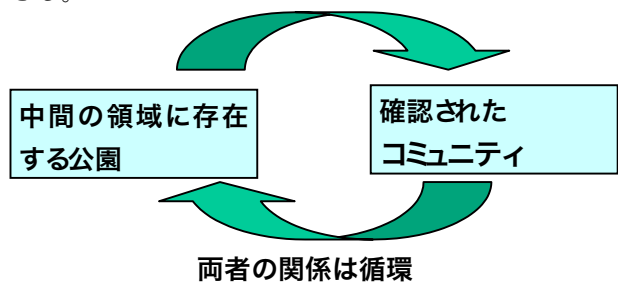


図4. 公園とコミュニティの関係

このような小公園の果たしている機能と、存在するコミュニティとの関係は循環しているものであり、どちらかが上位にあるものではないと考えられる。

5-4. コミュニティの場としての公園

一般に、公園がコミュニティに果たす役割としては、場所の提供、出会い、日常の交流がある。これ以外に、公園は定義されたようなコミュニティを浮かび上がらせる場、すなわちステージとしての有効な働きや機能を持っていることが確認された。

5-5. 今後の課題

利用者の中の、この公園を利用するコミュニティの一員だというコミュニティ・アイデンティティ的なものの確立は確認できなかった。今後観察以外の手法を用いた検討を加えることによって、公園とコミュニティの関係性がより明確になると考えられる。

参考文献

- 阿部 潔(1999) 6章 情報コミュニティの可能性 船津衛(編) 地域情報と社会心理 北樹出版 pp.136-137.
- 小野佐和子(1997) こんな公園がほしい～住民がつくる公共空間～ 築地書館
- クルパット,E. 南博文(訳)(1994)6章 孤独と統合-都市における社会関係 藤原武弘(監訳) 都市生活の心理学 西村出版 pp.145-177. (Krupat, E. (1985) People in Cities. Cambridge : Cambridge University Press)
- マッキーバー,R.K(1917) コミュニティ(中・松本(監訳)(1975) コミュニティ?社会学的研究:社会生活の性質と基本法則に関する一試論 ミネルヴァ書房)